

本省ヨリ内務省へ送付案

一福建獨立運動に就て

右陸軍省調査部ニ於テ發行ニ付出版法第四條ニ依リ

製本 貳部送付ス

圖書第七九六三號

昭和八年七月廿八日



0049

福建獨立運動に就て

昭和九年一月四日
陸軍省軍事調査部

目次

一	前 言	一頁
二	獨立政府の成立	三
三	獨立運動の経緯	六
四	獨立政府と共產黨(共産軍)との關係	九
五	獨立運動と北支那	一〇
六	獨立運動と蔣介石	一一
七	結 言	一三

福建獨立運動に就て

一 前 言

・ 福建放伐の王道を立國の精神とせる支那には政局の行詰まりに際し、政權を窺察する輩に依り動亂を惹起することは決して今に始まりたることではない。

・ 密夏北支に於ける動亂と云ひ、今次福建の獨立運動と云ひ、何れも中央政府主席たる蔣介石の秕政に乘じ、或は一層自己の地位の鞏固を策する爲、或は放伐以て自ら之に代らんと企圖せるものである。

抑、蔣介石の滿洲事變に對する措置を観るに、彼は事變勃發以來反滿抗日を以て支那の更生すべき唯一の道なりとし、虚傳之れ努め大衆を煽動すると共に、他面遠交近攻の傳統的外交工作に依り、聯盟及歐米列強に依存して帝國を牽制せんと試みたが、帝國の確乎不動にして一貫せる態度は遂に之等の策動を根底より無價値ならしめたるのみなら

福建獨立運動に就て

す、聯盟及歐米列強依存の當然の歸結として、之等の利權容認の強制となり、糖ては國土の國際管理、分割讓與の道向と想はせ蔣介石の失政を如實に曝露したのである。茲に於て易姓革命を常道とする支那に於て蔣介石政權の失政を觀之を打倒すべく福建が獨立を宣言するに至りたるは當然の行動と見做さるべきである。而して支那現下の情勢は此福建獨立の成否に依り各地に萌芽しある反蔣運動に決行の好機を附與するものと見らるゝ。元來支那は統一せられたること稀にして常に群雄割據し勢力の爭奪抗爭に終始して居り殆ど獨立國の體裁を具備して居らない。寧ろ各地方分立し各個に獨立國を樹立するところが却て支那獨特の平和的根本策かとも感せらるゝ。

而して今次福建獨立に方り、支那に關心を有する列強特に英米は却て其進展を阻止するか、少くとも廣東派と妥協せしむる如く努むるものと見らるゝのである。是れ福建の獨立は必然的に廣東側陳濟棠との對立を意味し、將來福建の擴大強化は延いて陳濟棠を脅し其地位を動搖せしむるに至ること明で、其結果は列強が過去二年に互り武力抗日援

助に名を藉りて扶植し得たる勢力を水池に歸せしむるの虞があるからである。

抑、福建は我臺灣と一輩帯水の地であつて、日支兩國間には同地不割條約を締結せられある程其動靜は直に以て帝國の國防に重大なる關係を有するが故に絶対に對岸の火災視する譯には行かない。

二 獨立政府の成立

十一月二十日李濟、蔣光鼐、戴戟、翁照垣、陳友仁、徐謙等は福州に於て中國臨時人民代表大會を開き、國民黨を離脱し南京政府の任命せる閩省政府主席の職を解任し、國民黨、藍衣社の打倒、反蔣、反南京政府を呼號し全國革命分子は連合蹶起して革命新政府と人民の權利を擁護すべき旨決議した。

其宣言文の要旨は概ね左の如くである。

中國は今や蔣介石政府稅政の爲既に最後の難局に到來しつつある。茲に我同志は國を救護し人權を保障する趣旨に依り福州に臨時大會を開き全會一致を以て中國革命

福建獨立運動に就て

を中絶し、中國を殖民地化し人民を塗炭の苦に陥れたるものは蔣介石の惡政に基因するものと認定し中國の自由獨立を圖る爲左の決議を爲す。

一 中國は中華全生産的人民の民主共和國であつて、其最高權力は全國生産的農工を協同支持すべき商、學、兵代表大會に屬するのである。而して

イ 中國々家の獨立は不可侵犯の最高原則に據り且

ロ 全國人民は種族、性、職業の如何を論せず齊しく自由平等の權を有す。

二 中國内に於ける帝國主義勢力を排除し、軍閥を打倒し、封建制度を除き國民經濟發展を期し民主政治を徹底せしむ、之が爲

イ 帝國主義の強制に依り成立したる不平等條約を否認し關稅自主を實施する。

ロ 計耕授田を實行して農業共榮の基礎を作り、一切の森林、鑛山、河道、荒地を國有とする。

ハ 民族資本の發展を奨勵して工業建設を爲し重要企業は國營とする。

ニ 人民は労働の権利義務を有す、軍閥、官僚、豪紳、地主及地匪窮民を肅正し、肉體労働者と精神労働者には最良の保護を加へる。

ホ 人民は身體、居住、言論、出版、集會、結社、信仰、示威、飛行の自由を有す。

三 人民臨時代表大會は蔣介石の南京政府を軍閥、官僚、豪紳、地主等反革命分子の代辯にして且、全民族の最も恥づべき存在なりと認め之が打倒を期す。

次で二十三日人民革命政府中央委員會は第一次會議を舉行し、李濟琛、陳銘樞、蔣光鼐、蔡廷鍇、陳友仁、徐謙、戴戟、李章達、黃琪翔、何公敢等會同の上左の如く決議した。

イ 政府は内外に宣言を發す。

ロ 李濟琛は軍事委員に主席を、陳銘樞は文化委員會々長を、陳友仁は外交部長を、蔣光鼐は財政部長を夫々兼任し、許錫清を財政部次長とする。

ハ 軍事、文化、經濟の各委員會委員數は暫時十五人とする。

國體獨立運動に就て

五

ニ 軍事委員會は李濟、陳銘樞、蔣光鼐、蔡廷鍇、戴戟、黃琪、鄧世增、徐景唐、沈光漢、毛維壽、譚啓秀、區壽年、張炎、李章達を以て編成する。

ホ 軍事委員會參謀團主任は戴戟の兼任とし、何公敢を福建省長、薩鎮冰を政府高等顧問とする。

三 獨立運動の経緯

元來本運動は西南獨立運動の延長として生れて來たものである。昨春歸國せし陳銘樞は爾來香港に在つて西南の情勢を觀望しつゝ、あつたが、廣東には陳濟棠が英米の勢力を背景として其の勢如何とも爲し難きを看取し遂に福建に著眼するに至つたのであるが、同地方には其舊部下たる十九路軍が駐屯して居るので、彼は舊勢力を利用して西南獨立の宿志を達成せんとし李濟を擁立すると共に、更に廣西派との合縱を策したのである。而して十二月初旬に至り、李濟、陳銘樞、蔣光鼐等香港に會し先づ福建に善政を布き人心を收攬し、各方面の了解を求め支那各地の反蔣分子と連絡を取りたる後、徐ろに

獨立を宣言せんとして陰に準備を進めつゝあつた。然るに偶々中央より懐柔の爲來福せし林森を説伏し、之を一味に加擔せしめんとして監禁中其逃走するに至り、時機を失すれば却て中央に乗せらるゝ恐ありしを以て、十一月二十日未だ準備の整はざるに急遽獨立を宣言するの止むなきに至つたのである。

而して獨立新政府の中心勢力は生産人民黨及第三黨である。此兩黨は先年武漢地方で鄧演達の創設したものであるが、鄧の死後其一部極左派は宋慶齡の下で第三黨として又、一部右派は陳銘樞に率いられて生産人民黨となつたもので、共に社會民主々義を奉ずるものである。

元來生産黨の主張する政綱なるものは、共產黨と異り共產黨が世界革命を企圖し工人を主體とする消費經濟の革新を企圖せるに反して、民族革命により農民を主體とせる生産經濟の發達を計るに在る。然るに既述新政府の政綱を見るに、生産黨、第三黨、共產黨等、各種の政綱主張が雜多に織り込まれて居るが、之は獨立に際し如何に各派の勢力

が侵潤しあるかを物語るもので、此數多分子を如何に制御し如何に操縦して以て統一すべきやは今後の問題であつて、其成否は革命政府の存廢を決すべき鍵であると推斷し得るのである。最近革命政府の右翼轉向を報道せられあるは此間に於ける一部の消息として見るべきものである。

福建獨立に方り廣東及廣西派との合縦に就ては、李濟琛と陳濟棠、胡漢民、學宗仁、白崇禧等廣東及廣西派との過去に於ける關係並反蔣の旗幟より見て一脈相通するものがあつたのは明である。唯、廣東の陳濟棠との關係は西南獨立運動が彼の蔣介石通謀によつて失敗せし歴史を有する關係上、福建との妥協提攀は至難なる状態であつたが、獨立當初彼は反蔣の通電を發して不即不離の態度を採り、福建の感情激發を避くるに苦慮しつゝあつた。然るに新政府が半ば赤化せし其政綱を掲ぐるや、陳濟棠は廣西側の福建不協力を豫想し、二十二日反福建の態度を表明し對立關係を明にしたのである。一方廣西派は新政府樹立せらるゝに及び、其政綱に反對を表明して之と協力を否定し積極的援助を

躊躇したが、最近新政府内の清黨せらるゝに及び漸次之と接近しつつある。

四 獨立政府と共產黨(共產軍)との關係

獨立新政府の赤化は、既述の如く標榜せられたる其政策より見るも明瞭なる事實ではあるが、李濟深過去の閱歷よりするも、或は其抱懐する思想よりするも、共產黨とは相容れざるのみならず、他面西南獨立の目的より廣西派の協力を必要とする現情に於て、共產黨との提携には喧傳せられぬ如く深入りしあるものと斷ずるは過早である。然しながら北方に中央軍を控へ南方に廣東の陳濟棠を有する福建新政府としては、自己補強の手段として共產黨と或程度の妥協ある事は事實であらう。

尙共產軍との軍事協定成立説も幾何の眞實性があるかは疑問である。唯江西に於ける共產軍が蔣介石の持久討伐策により漸次脅威を受けて昨夏以來福建に進出し、必死の活路を求めんとしたるに對し、第十九路軍に阻止せられ其目的を達することが出来なかつたが、本獨立運動に方り陳銘樞等の反蔣運動に便乘し、第十九路軍と某程度の妥協を爲せ

福建獨立運動に就て

る事はあり得べき事と思惟せらるゝのである。要するに福建獨立政府の赤色化傾向は事實なるも、其永續擴大性に關しては全然豫測を許さざるものがあつて、一に政府内部に醜醜しつゝある改組淨化運動の進展如何によりて決せらるゝものと見らるゝのである。

五 獨立運動と北支那

福建獨立に伴ひ北支方面に於ては、表面極めて冷靜の態度を採りつゝあるが、内部に於ては相當緊張して其成行を傍觀しある模様である。就中舊東北軍將領は一致して蔣介石支持の通電を發し表面の態度を明にはして居るが、この機會に於て西北方新疆方面の移駐を有利に解決せんとし外遊中の張學良を歸國せしめ、以て時局を自己に採り有利に導かんと策動しつゝあると共に、此運動の陰に宋子文一流の暗躍を傳ふる等停戰協定成立以來、安定を見つゝあつた北支も一抹の不安を思はせるものがある。

殊に昨夏反蔣の旗幟を擧げて察哈爾から北平に進軍せんとした馮玉祥は、泰山に在つて靜かに形勢を觀望して居たが、最近使節を福建に派して盛に策動しつゝありと報せら

れて居る。

六、獨立運動と蔣介石

蔣介石が江西の掃匪に全力を傾倒し、而も其成果擧らざるに際し、反將反國民黨を標榜する福建の獨立は南京政府を狼狽せしむるに充分であつた。即ち赤匪と福建との妥協は江西赤匪に對する蔣介石の經濟封鎖策を根底から破壊し、益々掃匪工作の挫折を來しつゝあるを以て、本運動の勃發と其進展とは企圖反蔣運動の導火線となるべき虞が多分に存在するものと云ひ得るのである。之を以て蔣介石は本運動勃發の氣運を洞察し、既に十一月十七日福建側に對し、辭を厚くして妥協を試み、其後有ゆる手段を盡して之が懐柔を策しつゝある。然れども蔣介石としては今更國民との公約を裏切り共匪と妥協し若くは一時的討伐を中止して、討匪軍を大々的に福建に移動せしむることは更に困難であらう。蓋し福建討伐の爲討匪軍の大部を抽出するときは、共產軍は一層其勢力を増長し、目下新疆より中支那に進出を企圖しある赤軍と相提携し、遂には全支赤化に迄進展

福建獨立運動に就て

一一

する権があるからである。結局現状の儘共匪討伐を續行し、福建に對しては先づ武力に依らず平和的解決を探るものと観測せらるゝのである。然れども最近報せらるゝ所によれば、北支及長江流域より數師團を浙江省境に集中し、尙優勢なる飛行機を以て福建に對し武力行使に出づべく準備中とのことである。

果して何れが眞なるやは未だ分明しないが、假令武力討伐に決するも不毛礮角而も陸上交通不便なる福建に對し、中央軍が進攻を肯すべきやは疑問である、又海上封鎖を企圖せりと傳へられて居るが、南京側の劣勢にして而も殆ど福建人のみによりて編成せられたる其海軍に依り、封鎖の効果を擧ぐることは頗る至難事なるべく、中央としては福建の内部崩壊を策するが最も賢明なる措置と云ふべきである。尙南京側として本運動が他方に波久するは最も怖るゝ所にして、就中山西の閩、山東の韓の向背に對しては監視を怠らざると共に、頻りに福建の共產化を宣傳し、中外の同情を失墜せしめんと策動しつゝある。

七 結 言

福建獨立運動の將來に關しては、該政權の財政的基礎が未だ確立せざる點に於て、尠からざる不安を藏するのみならず、既述の如く該政權が主義主張を異にせる雜多の分子の寄合世帯により組織せられたることは、遽に將來の動向に關し判断を下し得ないのである。將來第三黨並共產分子の勢力が擴充せらるゝに伴ひ、李濟琛の權勢が失墜せんか急速に赤化擴大の道程を辿るに至るべきは明である。然れども該政權にして部内の淨化に成功し健全なる發達を遂げ、其内容逐次充實せば形勢觀望中なる廣西派の蹶起を促し、相協力して陳濟棠を打倒し廣東を制するか、若くは之と妥協して西南獨立の宿志を達成するに至るであらう。

而して狀況の進展斯くなれるに及べば、北支に隱忍機の到るを俟ちつゝありし閩錫山、韓復榘等の反蔣軍事行動を誘發するに至るべく、果して然らば福建の獨立は正に全國に瀾漫し、而も發動せんとして發動し得ざりし運動の先驅を爲せるものと云ひ得るの

0064

0000

15

15